

無政府主義

準 備 号 未踏領域への飛翔

無政府主義革命への途 ————— 寺崎温司 3
公許アナキズムからの決別と新たな地平への飛翔

世界観の獲得に向けて ————— 根来倉生 9
マルクス主義の破産とアナキズム

無政府共産主義者同盟(ACL)
全 国 委 員 会 理 論 誌

武器と組織、これこそ進歩の決定的要因、貧困と手を切るための真摯な手段である！ 武器を持つ者はパンを持つ。銃剣の前に人は膝まずき、武装せぬ群衆は一掃される。武装せる労働者で蔽われたフランス、これこそ社会主義の出現である。

オーギュスト・ブランキ

我々は永遠の精神に信頼しよう。この精神が破壊し絶滅するのは、まさにこの精神があらゆる生命の汲めどもつきせぬ永遠に創造的な源泉なればこそだ。

破壊のよろこびは、同時に創造のよろこびである。

ミハイル・バクーニン

無政府主義革命への途

公許アナキズムからの決別と
新たな地平への飛しよう

寺崎温司

一、プロローグ

戦後日本のアナキズム運動の渦中で、アナキズム革命への方途を主体的に推進せんとしてきた私たちは、今、戦後アナキズムもまたひとつの擬制にすぎなかつたということを、痛苦の念をもつて吐かねばならない。と同時にアナキズム誕生のためかかる快感のアナキズムと根底的に決別し、新たなる地平へ、未踏領域へ飛翔しなければならない。

戦後アナキズムは、日本アナキスト連盟に適的に示されたごとく小ブル自由主義と小市民主義、さらに観念的／原理－原則／論に肺腑を喰い荒されたものでしかなく、あるいはまた感性にのみ依拠せらるゝアナーキ／主義でしかなかつた。かかる戦後アナキズムの脈路の意味するものは、まさにアナキズムの思想－論理の非在と運動の凋落にほかならない。これはまた「アナキズム」という範囲から把えるならば世界史的なものであり、アナキズムは常に大衆の日常生活にまで下降し追従しなければならなかつた。したがつてア・ブリオリなる組織否定と大衆行動至上主義に陥らざるをえなかつたのである。私たちはかかるアナキズムに追尾せる運動レベルでの謬点を超

二、公許アナキズムの黄昏

戦後の公許アナキズムの系譜は大別するならばアナルコ・サンジカリズムから大沢主義へと連関し、D・ゲランなどにも見うけられる所謂「現代アナキズム」の流れと、クロボトキン一八太舟三の流れをくむ「純正アナキズム」に区分されよう。そして今日、この双方が破産せる公許アナキズムの枠内で、前者は情況主義として、後者は心情レベルにおいて、双方共々不毛なる即自存在として併存しているのである。

公許アナキズムの主流はいさまでなく前者の「現代アナキズム」系にあり、その脈路は汚濁と屈辱にみちた日本アナキスト連盟に求

められる。アナ連盟は体質的には、戦後の自由民主主義の陽光に酔いしれたアナキスト同族意識より野合したものであるにすぎなかつた。したがつて連盟自身の思想内容・質は何ら精査されず、数ヶ月にして旧無政府共産党の残党（日本自治同盟）、岩佐作太郎を筆頭とする純正アナキスト（日本アナキスト・クラブ）が脱退・分離していくつたのであつた。その後、連盟としての機能を喪失したアナ連盟は解散せられ、新たに麦社を設立したのである。しかしながらこの経過においてアナルコ・サンジカリズムに固執する部分と、大沢正道を代表とする情況主義者の対立が顕示化し、十九世紀的労働運動を夢想していたアナルコ・サンジカリズムは情況主義者に圧倒されてしまつたのである。

ここで問題となるのはアナルコ・サンジカリズムの質である。アナルコ・サンジカリズムはいうまでもなく革命的サンジカリズムのアナキズム的方向へ発展したものであり、労働運動者の武装、ゼネストを基盤としたものであつた。アナルコ・サンジカリズムの「社会革命」論はマルクス主義の「政治革命」論に対し、反権力という視点において一程々度の有効性を有していくものではあるが、それはあくまでも革命の一側面のみを对象化し、内化したものにすぎなかつた。つまり近代社会の法「イデオロギー」による幻想支配（共同幻想）に着眼しえなかつたのである。したがつて彼らの革命の本質は経済革命であり、武装蜂起はそのためのものにしかすぎなかつた。だからして国家の共同幻想が貫徹されていない国では革命性を有しないたが、幻想支配の完遂された近代国家においては何ら有効性は持ちえないものである。それはアナルコ・サンジカリズムの悪しき上部構造一下部構造的な国家把握、つまり国家を支配階級の「私的機関」であり、「暴力装置」として位置づけた国家論に主たる要因を求める

しかしながらア・ブリオリにイズム性を否定したがため方法論が定されず、問題提起にとどまらざるをえない。そして唯一導き出さ

なき本質還元主義であり、啓蒙主義か、單なる感性主義にまつざるをえない。八太の主唱せる「地方分産制」はそれのみを抽出するな

ることができるだろう。したがつて国家（大権力）に、小権力ともいべき労働組合を対置したまさに「二重権力」論の展型の一つにほかなりないのである。レーニンはロシアの情況から労働組合にすべきものを「党」に求めたのであり、かかる意味からも明らかのように、アナルコ・サンジカリズムとボルシエヴィズムは国家論・権力論において表裏関係にあるのである。国家の本質は階級性と共に共同幻想性にあり、市民社会の発展は後者をより国家の本質たらしめる事により、法「イデオロギー」支配を促進し、国家を「公的機関」化たらしめたのである。したがつて国家「公的機関」に対する叛逆は、国家の共同幻想により一般大衆からみれば共同性に敵対するものであるとうつるのである。しかも法「イデオロギー」は公的権力として、闘争の拠点の最深部にまで容赦なく浸透し、効力を發揮するのである。したがつてアナルコ・サンジカリズムはひからびた骨とう品でしかない。国家の本質が上部→下部構造以前に共同幻想にあるならば、経済決定論たるアナルコ・サンジカリズムが何ら反國家を具現化しえないものであることは明らかであろう。いみじくもエンリコ・マラテスターが指摘するように、それは革命の一手段、戦術にしかすぎないのである。かかるアナルコ・サンジカリズムの謬点を政治と経済のア・ブリオリな分離の中に求めた大沢正道は、共同幻想の質を国家の存在ではなく、個人の意識の中に求め「一ゲル以前の觀念主義者と化してしまつたのである。大沢を中心とする情況主義者はアナルコ・サンジカリズムを近代アナキズムとして総括し、スペインにおいて破産を証明されたアナルコ・サンジカリズムに固執するのは護教主義でしかなく、従来のアナキズムという枠にとらわれる事なく広い意味で革命思想を検討し、新たなる思想を形成しなければならないといふのである。（大沢『反国家と自由の思想』）

構造」下部構造的な国家把握、つまり國家を支配階級の「私的機關」であり、△暴力装置△として位置づけた國家論に主たる要因を求める

しかしながらア・ブリオリにイズム性を否定したがため方法論が肯定されず、問題提起にとどまざるをえない。そして唯一導き出された革命論とは國家意識の変革といふ、國家の存在を捨象した意識革命としての「なしくずし革命」、つまり構造改革主義にほかならぬのである。それはまさにアナルコ・サンジカリズムに対する観念主義的対応以外の何ものでもない。かかる論を組織論としたのがCSLなのである。彼らの革命論は、國家に対する無知のなせる技である。

アナ連盟のサロン主義の質を行動化したのが六七年の△反委△であつたが、それは組織的にも大衆行動の域を出るものではなく、思想的にもこれらを凌駕するものはなかった。

△反委△黒層社の三分解の中から発生したのが背叛社△叛戦攻撃委であり、彼らはアナ連盟系と対決する事を唯一つのアナキストとしての存在性とした。背叛社は権力対象を世界資本と規定し、近代史を世界資本対土着資本の関係で総括し、その革命論を純正アナキズムの主唱する△アナキスト少数者蜂起△の先駆理論の中に求めたのであつた。したがつて彼らは行動主義を本質とし、一国無政府革命△民族連合を世界資本打倒への指標としたのである。しかしながら彼らの視点は民族連合の共同性にまで及びえず、皇國国体の総括の中に△社稷△を視ることができず、「無政府国体」という非論理主義へと拡散してしまつたのである。国家に個を国家性として対置させることによるニーチェ主義の亜流と化するのであつた。彼らの背叛主義なるものは最もデマゴギー的色彩の濃いものと思われる。

戦後の「純正アナキズム」はその意味では戦前の八太舟三以下であり、無組織的行動主義と大衆蜂起に拝跪したものでしかなく、実質的には運動を組み立なかつた。その特色は情況を捨象した方法論を評価しながら、その運動落を自らの組織形態を創出しえなかつたためと総括する。つまり彼らはノンセクトの質を捨象したまま、

なき本質還元主義であり、啓蒙主義か、単なる感性主義にならざるをえない。八太の主唱せる△地方分離制△はそれのみを抽出するならば、アナルコ・サンジカリズムの△サンジカ連合制△よりはるかに正当であるのだが存在論が欠落しているがゆえにやはり共同幻想を把握しえず、下部構造変革主義にしかなりえないものである。しかも方法論がないゆえ空想的の社会主义として純化せざるをえない。今日、タナトス社（斧の会）がその脈路に連がるものであるが、例外にもれる事なく小集団△サークル主義として啓蒙運動しか行いえないでいる。△テロル△を言葉でしか表わせえない彼らは、裏がえして最もサロン的な合法主義集団にしかなりえないであろう。△蜂起△は言葉や心情では何の意味をも有しえず、行為化された時、はじめて△蜂起△となりうるのである。

三、公許アナキズムの現情

公許アナキズムは麦社・CSLとタナトス社を両極として存在しており、その中間的位置にいくつかの小集団が介在している。麦社・CSLの原点は「近代アナキズムの破産」にあり、一方タナトス社の方は「戦後アナキズムからの決別」にある。しかしながら双方の視点、相克関係は戦後日本のアナキズムの二つの系譜の延長にあるにすぎない。CSLは近代アナキズムをスペイン革命で敗北したアナルコ・サンジカリズムで頂点に立ち、破産したという觀点から大澤的にサンジカ意識主義で超克せんとするのだが、現実的にはノンセクト運動の総括から出発しており、アナキズムを反スターリン主義のレベルにまで押しさげてしまつたのである。彼らはノンセクトを評価しながら、その運動落を自らの組織形態を創出しえなかつたためと総括する。つまり彼らはノンセクトの質を捨象したまま、

われる事なく広い意味で革命思想を検討し、新たなる思想を形成しなければならないというのである。（大沢『反国家と自由の思想』）

その限界は「いわば機能に關する事柄で、本質そのものの限界とは言ひ切れない」（永久革命一號）として、ノンセクトの中にはすでに彼らのいうアナキズムの本質が含まれていると見ていいため、機能的不完全性を完全化する事により展望が開けるといふのである。その機能不備を、少なくとも超克させようとしたのが「媒体としてのアナキスト評議会」という視座である。彼らのアナキズムとは「原理的正当性のみならず現実的有効性を備えたもの」というのだが出発点が機能論—技術主義にあるがゆえ、情況主義的なものにならざるをえないるのである。したがつて「前衛党方式の徹底的な否定者がアナキズムであったことは、あらためて強調するまでもない。我々も、前衛党方式の否定者という限りでアナキズムの立場に立たねばならない」（永久革命二号）という愚論がとびだしてくるのだ。これはアナキズムのわい少化でしかなく、反前衛的独立マルクス主義者も彼らの視点からではアナキズムになってしまふ。彼らのかかる誤りはアナキズムの存在的本質論に由れる事なく組織を対象としたための結果である。（例えは彼らと同じ質にあるD.グランはアナキズムとマルクス主義の人間論の差異、その論理的方法論の異相を捨象したまま双方の融合を主唱しているが、結果的には折衷主義にならざるをえない。）したがつて彼らのいう「近代アナキズムの破産」の質は、近代アナキズムの実践組織の未熟性の破産を宣告したにすぎず、アナキズム總体を対象化してないがゆえ本質的には近代アナキズム末派にしかなりえないのである。しかも彼らと同じ視点に立つたうえで彼らの組織論を精査してみると、彼らが新たに質と自負してやまない組織論も実は手直し的小手先細工でしかない事が明白となる。彼らは組織の形態を正しく革命組織と社会組織の二つのレベルで把えながらも運動論がないゆえ、革命組織と社

会組織の関係が技術的にならざるをえない。彼らはFAIIONTは行動提起機関でしかなく、実際の運動は運動体が行うといふ構図から、ア・ブリオリ大衆革命路線としての旧来のアナキズムの範囲から脱け出でていない事が明らかである。しかしながら彼らが媒体／を主唱する主眼は、近代アナキズム破産のもう一方の側貌である「過渡期論の欠落」の中にあり、彼らの過渡期論の実質として媒体が位置づけられるのである。すなわち彼らは過渡期の内実を文化革命的な意識変革に求め、かかる意識変革をなした運動体は未來社会の形態である共同体に連関し、国家の法／イデオロギー支配、つまり共同幻想は幻想になりえず、国家は国家としての機能を失うといふのである。かかる時に必要なのが大衆の意識変革を主体的に促進する媒体の存在なのだ。したがつて媒体／評議会の性格はイデオロギー集団として位置づけられ、現実的には何事をもなしえない提言主義としてしか存在しえないのである。現実闘争とは全く空離した（それ自身として）ものとして、観念により運動体の方向を左右させる政策提起機能集団として、運動レベルとは離れて指定される。つまり「運動の組織的保障（運動体の実体づくり、総合的連絡等）を担い」「運動体と／評議会／は異次元に存在しつつ、内容的に相互に浸透しあう」（永久革命一號）ものとなるのである。しかしながら冒頭に記したごとく国家を個の国家意識のレベルで対象化しているのがゆえに、ヘーゲル的觀念論、革マルクス主義の使徒となりさがつてゐるのである。国家を意識問題で把えているがゆえに、個の国家意識が共同体意識へと変革されたならば、国家は存在しないのであり、これを押し進めるのが媒体であり、主体は大衆となる。つまり大衆の国家意識変革により国家は事实上廃棄されるという、

まったく国家の存在を捨象した觀念主義であり、反国家意識による全大衆の／團／み／總オルグ路線にならざるをえないのである。

1 ミズム以外のなにものでもない。それは国家を解明せず、技術的に主体をア・ブリオリに指定期結果である。私たちはかかる構造

い事が明白となる。彼らは組織の形態を正しく革命組織と社会組織の一つのレベルで把えながらも運動論がないゆえ、革命組織と社

会の国家意識が共同意識へと変革されたならでは、国家は存在しないのであり、これを押し進めるのが媒体であり、主体は大衆となる。つまり大衆の国家意識変革により国家は事実上廃棄されるという、

まったく国家の存在を捨象した観念主義であり、反国家意識による全大衆の△囲いこみ△総オルグ路線にならざるをえないものである。意識変革主義であるがゆえに、「全体革命」の中の政治革命（国家破壊）が意識にまで還元せられ、事実上国家の存在には肉迫できえないものである。これは大衆の革命性に対する先駆主義であり、革命は媒体との関係により形成される運動体の形成過程の中にわい少化されているのである。革マル△黒寛主義が党形成の中に革命の内実をすりかえたのに対し、CSLは運動体形成に横すべりさせたのだ。

したがつて『アナーキー組織論の展望』における革マル△黒寛主義の批判も△前衛党△と△媒体△を並置した機能一技術主義的なものでしかなく、双方の質は同じである。国家廃棄は単なる意識レベルではなく、共同幻想奪取のため実質的に国家存在を廃絶しなければならないのである。国家が存在している情況にあつては国家の共同幻想打破△大衆の革命主体としての登場はありえず、革命を軍事にわい少化させる方向は無意味だが軍事の問題を捨象しては、国家存在の実質的破棄も、大衆の国家意識変革もなしえないものである。それは現代社会構造の今一方の面である市民社会（欲望体系社会）の発展により人間が△私人化△されている情況によつても明らかであろう。管理社会△私人化の中に、唯一の共同性として存在する国家△共同幻想体は大衆の覚醒を不可能性とする事により存在しているのだ。だからして私たちは大衆の根源的革命主体性に拝跪するのではなくして、革命主体としての大衆をつくつていかなければならぬのである。CSLは意識変革を革命論としているがゆえに、媒体などといふ曖昧なものを設定して、事足りると思いこんでいるのである。国家の共同幻想と、その社会構造である管理社会△私人化を攪乱せず、その中で意識変革がなされうるといふのは極度のオブテ

△ミズム以外のなにものでもない。それは國家を解明せず、技術的に主体をア・ブリオリに指定した結果である。私たちはかかる構造更新主義者の右からのアナキズム再編組織化を粉碎し、反国家闘争を具体化しなければならない。アナキズムの質を問うことなく、アナキズムをノンセクト△反スターリン主義のブーバー△ランダヴァー的超克にわい少化する彼らは合法闘争主義者として、右翼日和見的に、アナリストの革命闘争を内部から崩壊させる反革命集団としてしか登場しえないのである。

他方彼らとは対置にある純正アナリストはタナトス社（斧の会）を主軸に、革命の観念化しかなしえていない。彼らは蜂起を言語としてしか把握しえず、具体的実践過程においては革命行動を革命のはるか彼方へ追いやることにより、啓蒙集団としての合法主義者にしかなりえないのである。彼らの「戦後アナキズムからの決別」という主張の内容は、戦後アナキズムを、主流派のアナ連盟△べ反委一麦社・CSLと一面的に規定し、主流派の純正アナキズム過少評価に對する、少数派△純正アナリスト側の嫉妬にしかすぎないのである。彼らが純正アナキズム特有の小集団主義に對し、「全国的大連合」（神もなく主人もなく三号）を主唱するのは、アナキズム運動の低迷現象に對する技術主義的再編策動でしかも、かかる事をもつてしてもアナキズム運動が飛躍しえないことはすでに周知の事実である。言葉としての革命心情が革命となりえないことは歴史が示している。彼らが方法論、存在論を欠落させたまま歴史主義的にアナキズムを主張するのはエセ・アナリスト大沢ばりの『アナキズム思想史』の純正アナリスト版にすぎず、アナキズムの講師にしかなりえないことを暗示している。彼らは一派を形成する事はできるが運動を組織し胎動させることはできないのである。

私たちCSLの構造更新主義、タナトス社の講釈主義というアナキズムのわい少化。歪曲に対し、具体的過程でアナキズムを甦生していかなければならない。

四、私たちの視座

戦後アナキズムが革命にとつて無害無益であった主因は観念主義。空論主義の中に求められる。タナトス社は大情況主義者として、この枠内に埋没しさつており、CSLは小情況主義者として革命性を喪失してしまっている。つまり打倒対象たる国家を明らかにしえなかつたがゆえに、△反國家△を抽象化するかまた改良化してしまつたのである。対象の本質を論理的に把握しえなかつたがゆえに、必然的にアナリスト主体の内容も革命組織として指定しえないのである。それは△反國家△革命の空論倒れとなり、革命を主体的に推進していくことができず、△裏ぎられた△主義の再演となりさがるのである。

私たちはマルクス主義のごとくア・ブリオリな普遍性からではなく、現実の個別性から出発する。個別性の中に普遍性への回路。接点を求めるのである。つまり△個の自由△と△人類的解放△というアナキズム革命の実貌の論理化にほかならない。従来よりアナキズムは個の自由と共に、人類解放という普遍的な社会革命を志向してきた。しかしながら△個の自由△という個別性と、△人類的解放△という普遍性の関係を把握しえず、△個の自由△の主觀主義から、△人類解放△を主觀的にしか把えられず、△個の自由△すらも明らかにしえなかつたのである。△個の自由△とは自己の意識であり、存在であるが、それは個の存在に対する認識がなくてはありえない。認識なき△個の自由△、つまり意識の本質を対象的に認識しえないのである。

抽象的自己存在の△個の自由△とは、バクーニンが『神と国家』で嘔吐した神学的自由にしかなりえないものである。△個の自由△とは自己意識の本質を有する対象との関係性において、意識されるのだ。(人間の自己意識はデカルト流の個別意識の中にあるのではなく、「△△への意識」として常に対象との関係意識の中にある。)

私たちは△個別性△と△普遍性△の問題は国家論のレベルより対象化されなければならないと考える。何故ならば私有制の進展が個人を△私人化△し、ヘーゲルが提出したごとく人間の共同性が國家レベルで把えられているからである。国家の本質は△共同幻想△にあり、その中で階級性が作用しているのである。そして国家の本質が共同幻想にあるならば、国家廃絶は、個と共同体の利害の一体化に求められる。それはさらに宗教にみられるごとく個の入眠化ではなく、共同幻想の質の変革に求められなければならない。さもなければ個の欠如せる、個の主体性なき共同幻想にしかなりえないであろう。共同幻想と個の合致はまず身体的に制約されている人間の最初の行為、つまり肉体組織維持に不可欠なる△必要欲求△の普遍性に求められる。そしてそれは国家制社会から個的△共同性社会への過渡期論を提出させる。

現代の高度に管理化された社会においては、大衆は革命主体として存在しえない。△私人化△された大衆の一部は左翼官僚に「左から」△反革命的に組織化され、彼らをも買く市民社会体系により総体的に大衆は管理化されている。大衆自身がその存在において権力の支柱と化しており、現代社会の構造は、旧來のごとき△前衛一大衆△という先驗主義的革命論を不可能化してしまっている。革マルの階級意識形成論も、青解派の感性からの叛逆の破壊性は明白であり、これは党派・無党派という構図を超えて現在を包含しているのである。

り、革命への途はあまりにも暗く、絶望的である。私たちは革命に接することができない情況下におかれているのである。革命と私た

私たちは革命とは共同幻想の問題であると主張する。そ○美

在であるが、それは個の存在に対する認識がなくてはありえない。認識なき個の自由、つまり意識の本質を対象的に認識しえない

ところ先駆主義的革命論を不可能化してしまっている。革マルの階級意識形成論も、青解派の感性からの叛逆の破壊性は明白であり、これは党派・無党派という構図を超えて現在を包含しているのである。

り、革命への途はあまりにも暗く、絶望的である。私たちは革命に接することのできない情況下におかれているのである。革命と私たちの間に目に見えない介在物が存在しているのだ。私たちはまずこの介在物を除去しなければならない。介在物の除去は前段階行動であり、革命そのものではないが、のことなくしては困難な革命を遂行していくことはできないであろう。叛旗派にはかかる視点が欠如しているゆえ、その正当なる論も単なる提言主義にしかなりえないのである。

私たちは革命とは共同幻想の問題であると主張する。その裏面の視点がまさに前段階行動を媒介とした革命主体の創造にはかならずいのである。

反国家闘争を実体化し、無政府革命へ飛翔すべく、すべての自由戦士は黒旗の下、無政府共産主義者同盟（A.C.L.）に結集せよ！

世界観の獲得に向けて

マルクス主義の破産と アナキズム

根来蒼生

あまりにも不毛な思想の空念仏が過ぎわたる現在の状況の中で、今こそ我々に現代階級社会の内部的構造の本質的把握と鮮烈なる革命の色彩をおびた思想のはい胎が要求されている。旧来のそして又現在の全てのアナキズム運動が変革対象を具体的に对象化せず、イメージとしての無政府社会にのみ固執したが故に方法論、本質論が欠落し、感性一原理論一主義の不毛な円環を突破することができず、その不毛性の延長線上で、近代アナキズム運動に否を叫んでい

たにすぎない。それが故にその不毛なアナキズム思想は、流動の今の現在の時空を未来の革命に向けて架橋することも、時代の転相に對して有効的に対応することさえ出さず、未来の革命と現在の位相の乖離を反國家・絶対自由・自由連合といったもはや空洞化した死語によつておおい隠すか、又は社会から隔離した個の觀念空間を水垂志向によつて上昇し、サロン芸術集団・あるいは陰謀家集団へと不毛の奈落へ無限落下していく。その近代の延長線上にあるいっさいのアナキズム運動に對して今我々は、はつきりと決別状を突きつける。そして我々こそが旧来及び現在のアナキズム思想のきらびやかな幻想を極北まで激撃し、その否定の極限においてそれを肯定に転化すべく、時間一空間（世界一歴史）の全総体を貫きぬけるアナキズムの論理一革命一を未踏領域に構築していかねばならないのだ。

マルクス主義的革命論の崩壊
共同幻想としての国家は共同体との連関においてしかとらえることができない。したがつて人間一人間の関係の質を問題にしつ

つへ共同体一国家へを貫ぬく関係を擧つことによつて革命は革命をとりえる。であるから革命はへ個人のへ意識一存在へ總体を根底的に転位さす形をもつて表出されへ共同体内部の關係の転位として具現化されなければならない。國家が階級の私的利害を法・道徳といつた共同幻想をもつてへ人間一人間の關係性を内在的に規定しつつ、私的利害を全社会の共同体利害へと押し広げる。そしてそのへ共同体の共同幻想としての國家がへ共同体内部にどれほど深く下降しているかによつて国家そのものが普遍的国家として成立するかの度合である。そこに國家の共同幻想の質が宗教（それもキリスト教のように「神の前には人間は平等である」といつた普遍性をおびた宗教）からさらに普遍性をおびた法へを転化する必然性がある。又共同幻想の質が普遍的であるということは私的利害を共同体利害の仮象の中へそれだけ普遍的に浸透させることにほかならない。我々は社会過程におけるそれらの共同幻想の質から社会過程そのものが解放される質を内在化させた革命論を打ち出すことによつて、疑似共同幻想の死滅へすなわち国家の死滅へ向かうことが可能であると考える。

戯画としての政治革命→社会革命

革命論を打ち出す時へ個人一共同体一国家へを貫ぬく總体の關係を認識することなくしてへ国家の根源を擧つことなどはできない。人間が幻想を表出する動物であるかぎりへ人間一人間の關係の空間としてのへ共同体へが共同幻想を表出するという過程は關係の動物としての人間の自然過程である。そして人間が關係の動物であるが故に法・道徳に支配されるのだ。そこに法・道徳がいかに社会過程にくりこまれているかによつて法・道徳が力を持ちえる。それが

は科学的であるが黨の権力を廢絶するのは文学的なのだ。黨権力に自己廢絶の論理を内包しないかぎり過渡期におけるプロレタリアークスの力を持ちえる。それが

故にヘーゲル的国家はとらえられないのだ。吉本隆明が「国家は。。。国家本質の外部では各時代の社会の現実的な構成にある仕方で対応し変化するものとかんがえることができる。」（自立の思想的根拠）などという時、「国家は社会に対し変化する」が社会に對して廢絶され得ないことを明示している。「国家本質」は社会の外に存在するのではない。人間の幻想を規定する具体的社会との相互的關係において共同幻想そのものは検証されねばならない。そして法・道徳といつた政治過程が社会過程に重なることによつて権力が成立するかぎり政治の解放は社会の解放との相互關係の中においてしか成立しない。政治が政治として成立しないこと、それは政治革命が政治革命としてのみ成立しないことであり、政治革命は社会革命を含み、社会革命も又政治革命を必然的に含まねばならないのだ。意識過程における政治革命は必ずしもその意識を下から支えていいる物質過程の転変を内包しないかぎり、不毛である。政治の幻想性を支えている社会に肉迫することのない政治革命→社会革命という革命路線は、國家論的に不可能なのだ。又政治革命→社会革命という構図から機能的に党を打ち出したマルクスは、あるいはレーニン（外部注入論）は党そのものが機能面から規定されているが故に、機能が終了した後の党については一言もふれていない。マルクスよ!! レーニンよ!! たとえば政治革命によって政治権力を握った党権力はいかに止揚されるのか。党の規定の中にへ個人一共同体一国家へを貫ぬく本質論が内包されていないが故に党そのものの権力は止揚すべく論理を、すなわち自己権力廢絶の論理を内包するすべを持たない。したがつてマルクス自身、過渡期世界（政治革命）までは明確に科学的に論理だつているが過渡期世界から共産主義世界に移行する論理など明示することはできないのだ。党が権力を把握するまで

は故に法・道徳に支配されるのだ。そこに法・道徳がいかに社会過程にくりこまれてゐるかによつて法・道徳が力を持ちえる。それが

は科学的であるが党の権力を廢絶するには文学的なのだ。党権力に自己廢絶の論理を内包しないかぎり過渡期におけるプロ独の独裁権力を止揚する論理など提出できないのが当然である。空想的社会主義が、方法論が欠落していたが故に空想的であったようだ。マルクス主義が過渡期世界から共産主義世界へ転位する具体的方法論もな

いまま政治革命→社会革命あるいは過渡期社会→共産主義社会など

とほゞ革命論こそ国家廢絶を具体的射程に入れない空想的共産主義革命であるにしかすぎない。ブルードン・フーリエといつた空想的社会主义の幻想を批判したマルクスは、その同じ批判の視点によつてマルクス自身の論理が批判されなければならなかつたのだ。マルクスにおいては過渡期社会とは過渡期といふ名の示すとおり、共産主義社会へ移行すべく手段として位置づけられていたはずである。しかしながら手段としての過渡期社会は、その過渡期社会の内部に過渡期社会そのものをアウフヘーベンする論理が含まれていてこそ、すなわち共産主義社会へ移行する論理が内包していく始めて共産主義社会へ移行すべく手段としての過渡期社会となる。資本主義の内部の矛盾によつて社会主義へ転位するよう、過渡期社会の内部に共産主義社会へ転位する論理が内包されていなければならない。それが科学といふものだ。科学性を誇るマルクス主義が過渡期社会から共産主義社会への移行の論理を文学的にしか打ち出せない現在、マルクス主義は非科学主義にほかならない。まず過渡期の権力論においてマルクス主義はつまづいている。党権力が機能面からしか打ち出されなかつたが故に、党権力止揚論といつた権力廢絶の本質論は、機能面から打ち出されたプロ独からは創出さることなどとうてい不可能でしかない。すなわち党組織論の中に個一共同体一國家の総体を貫ぬく本質論が欠落し、そのような党のプロ独による手段

としての過渡期はバクーが云つたように党のプロレタリアートに対する独裁に転化することによつて、目的としての過渡期に変質するのだ。現在のソ連・中国をはじめとするスターリニズム国家の源泉を我々は目的としての過渡期に転化したマルクス主義としてとらえる。

党——大衆

現在、戦旗の諸君が「党の革命」などと絶叫しているが、△党▽の本質的規定の中にも△党▽権力止揚論を内包していない時「党の革命」は単なる空語にしかすぎない技術論である。△党▽を単純に実践との機能面からしか位置づけていないボルシェヴィキ伴は、その△党▽を持ってプロ独から共産主義社会へと転位さする論理が出ることなど本質的に不可能なのだ。ブンドの諸君がいくら△党一軍一統一戦線▽とほざいても△党一活動集団一大衆組織▽といふ旧来の△党一大衆▽との関係に軍事をプラスしたにすぎない。それが故に△党一大衆▽へと吸収されるのだ。ロシア反革命におけるマフノ黒軍に対する赤軍の弾圧がそれを明確に示してゐる。我々の社会過程とソビエト論と同様、蜂起のためのソビエトであり、ソビエトは蜂起完了後△党▽へと吸収されるのだ。ロシア反革命におけるマフノ黒軍に対する赤軍の弾圧がそれを明確に示してゐる。我々の社会過程としてのソビエトの視点は、蜂起のためのソビエトなどという機能面からのみとらえたソビエトではなく、自立論を含んだソビエトなのだ。ソビエトを蜂起の機関であると同時に自治の機関として位置づけている。ソビエトの自立論を含むことにおいて我々は政治過程の共同幻想を無用たらしめる国家廢絶の論理がでると考える。プロ独が△党一大衆▽の関係の構図を絶対に止揚できないのは、社会過程の大衆に対して△国家一大衆▽の関係を△党一大衆▽におきか

えただけにしかすぎなく、構造的に△党▽→△大衆▽の一元的支配のものでは△大衆▽から△党▽を規定することなどできないのだ。レーニンが「國家と革命」の中で議員の給料がプロレタリアートの給料より高へことをなげていているように、党は一つ階級として登場する。そしてプロ独が階級として登場することは△党-大衆▽の關係の固定化でありスターリン主義へと疾走するのは確実である。マルクス主義者どもよ!! —レーニンが悲愴で皮肉な盲点の中にあつたところの、革命においても変革されなかつた唯一のものとは、さて党である。(幻視の中の政治)——という埴谷雄高の痛苦の言葉を己れの存在の痛みとしてとらえなければならぬのだ。△党-大衆▽の關係、及び△党▽権力の止揚の問題を曖昧にした状態で過渡期社会→共産主義社会などとほざくのはマンガにしかすぎないのだ。そして過渡期社会の固定化としてのプロ独は資本主義を純化した形態をもつて、すなわちソ連のような国家資本主義へとスターリン主義へと変質するのだ。我々はボルシェビキの△党-大衆▽の關係、及び△党▽権力の問題を構造的に止揚するものとして△評議会▽及びソビエト自立論を内包するところの△同盟-軍-ソビエト▽を現在的に提出する。(革命論、階級形成論、過渡期論等の詳細は次号に展開することを約束する。)我々の視点は国家廃絶を射程距離に含み、共同幻想の質の転位を構造的に止揚するものである。マルクス主義のように過渡期社会までが科学でそれ以後は希望的観測、及び主觀的願望などといふオプティミストではない。たとえ叛旗の神津陽が△革命▽から△かくめい▽へと叫んだところで△革命▽から△かくめい▽へ転位する本質論は何なのだと問いたい。△革命▽から△かくめい▽へ転位する本質論、方法論がマルクス主義のブルルの中にあるかぎり△革命▽から△かくめい▽へと叫ぶこと自身、流

行の波に乗つてゐるだけにしかすぎないだらう。△革命▽をその根源において撃つ思想性のはいたいこそが現在要求されているのだ。現在の国家を打倒するのが革命ではない。(それは下剋上だ!)現在の国家を打倒する質にいかに△個-共同体▽の關係の全的自由を具現化さす論理内容が含まれているかによつて革命と云えるのだ。まさに△革命▽から△かくめい▽は旧来の△革命▽を根底的に激撃しつづける論理の提出によつて成立する。

国家論から無政府主義革命へ!

△個▽の解放の観念を△個▽の意識のカテゴリーに擬制し、△共同体▽との關係の中で△個▽をとらえず、水垂的に△個▽の実現の空間をめざして飛翔した過去の全てのアナキズム運動及び思想は自己の立脚点すら対象化できず、△共同体▽と隔離し他者と全く断絶した△個▽の存在の意識空間においてのみ幻想としての解放の仮象を構築したにすぎない。あえてバクーが国家論の、そしてステルナーが国家の共同幻想を突き破る自立論の萌芽をみせたにすぎない。その他の全てのアナキズム思想は不毛でしかない。我々の出发点は意識過程と存在過程である。そこから△個-共同体▽へ△共同体-国家▽への關係を飛翔することによつて始めて、明確なる無政府主義革命の論理を組織論、ソビエト形成論、自立論を含みつつ提出することができると考える。過去のアナキズムが△意識▽がわからずして△意識▽からのみ出発したが故にデカルト的な純粹意識の囚縛を離陸できず方法論、本質論の欠落した「国家の即自廃絶!!」という念仏をブツブツ唱えているだけにしかすぎなかつた。現実的自己を世界との關係性の中でとらえず幻想的自己へと、自己の意識空間を上昇しつづけるアナキズムには文学的空間の創出は可能であ

るとしても、△共同体▽的空間へと世界空間を貫ぬく思想性などは

らしか出発していない。大状況主義の不毛性はそこにあるのだ。又△意識-存在▽から出発し△個-共同体-国家▽の総体を貫ぬく関

のなかくめいへ転位する本質論、方法論がマルクス主義のブール

自己を世界との関係性の中でとらえず幻想的自己へと、自己の意識空間を上昇しつづけるアナキズムには文学的空間の創出は可能であ

るとしても、共同体の空間へと世界空間を貫ぬく思想性などは、胎するすべを持たないのが当然である。あるが故に私的意識の空間性しかもちえなかつたアナキズム思想は国家空間が持ちえていた共同幻想としての普遍意識の空間性へ持ちこまれた時、それは文學へと表現されるか、もしくはテロルへ犯罪へと疾駆するすべしかないのだ。何故なら普遍意識に私的意識を対応させ自身が論理的に不毛である。普遍意識は私的意識を吸収させ形で共同幻想として社会過程にくみ込まれてゐるから。個の解放を時間——空間の総体を貫ぬく中でとら得ずして私的意識の領域で把握し、それを運動の立脚点として展開される運動は不毛でしかないのだ。個人原理ではしょせん国家原理を越えることも激撃することもできない。個人原理が不毛であるということは、個人原理の連合としての自由連合が不毛であることであり、平連、市民アナキストの思想の限界性は国家を越えることのできないところにある。意識から出発するアナキズムから国家もソビエトも組織も出てくるわけはない。

意識から出発した思想は意識に終着点を求めざるを得ないのだ。意識は意識そのものにおいて止揚できない。意識は存在との不斷の斗いの中ではじめて止揚することが可能である。客体との相互媒介の存在しない地平で革命的意識をいくら増殖したところでそれは不毛である。行きつく所はせいぜい革マルⅡ黒寛主義でしかない。我々が意識存在から出発するということは、それなしに個—共同体—国家の関係を対象化することも我々の革命が国家の幻想を突き破るものとして、組織された日常性へ市民社会の時間——空間へ肉迫する思想ははい胎できないだろうと考えるからである。旧来のアナキズムがそうであつたように政治革命（意識過程）を先行させるマルクシズムもしょせん意識か

らしか出発していない。大状況主義の不毛性はそこにあるのだ。又意識—存在から出発し個—共同体—国家の総体を貫ぬく関係性の考察をぬきにして現代階級社会の時間——空間を撃つ無政府主義革命の論理などであるわけはない。国家を問題にしつつ国家を突き破るのだ。すなわち共同幻想の質をいかに根底的に転位さすのかという事が問題である。その問題をぬきにして社会過程が変化したとしても根底的には変化する以前と同じなのだ。思想は己れは今ここに存在しているのだという具体性から出発し具体性に終わらねばならない。意識—存在の解放から出発し意識—存在の解放に終らねばならない。であるから個が類との関係の中において個であり、類を問題にすることによって類の観念の疎外としての国家（ヘーゲル主義を意味しているのではない。）へ向かうことによって類の共同体の意識過程と存在過程の総体の根底を激撃する無政府主義革命を明確に提示することができる。人間の意識—存在過程から出発しつつそれを根底に国家を共同体の質を、共同体との関係性の中で明確に対象化し共同体の質を突破するところの共同体の創出に向けて、我々の運動は方向づけられる。それが故に我々無政府共産主義者同盟は国家に共同体に固執するのだ。社会過程に浸透しているところの現代階級国家の共同体を撃ちつづける論理を内包した共同体の創出へ、すなわち蜂起と自治の機関としてのソビエトの創出が現在我々に要求されている。したがつて我々の組織論は共同体を共同体の規模において突破する共同体論を含みつつ、構造的にその論理を保障すべく組織の構造的構築である。我々はOLSや大沢主義の自由連合ではない。又ボルシェビキどものように内部に階級性を内包した反革命組織でもな

い。ボルシェビキ党は「階級対立の廃絶を目指すものの組織がしばしば廃絶するべき當の相手の組織と同じもの」（埴谷雄高）でしかないのだ。組織を我々は自由連合・中央集権などといった形で固定化しない。非合法の時は必然的に地下組織が必要であるようくに状況との連関の中でとらえる。革命が苛酷なる弾圧の中で行なわれるのに自由連合などとほざくのはバカでしかない。組織は社会の構造的矛盾が生み出す社会関係の対立によって規定されるのだ。そしてそれは自発性と意識性の媒体であり、△認識・媒体・実践△の原理を貫ぬくのである。そして階級社会の時間・空間を激撃する我々の論理の提出によつて△共同幻想△の質の転位をせまらねばならない。それ故我々の論理は△国家△を越える論理として提出せねばならぬのだ。△国家廃絶△を透視する我々は又△国家△に固執しつつ△国家△を貫ぬくのだ。したがつて△共同幻想△の質を問題にした時マルクスのように生産力の飛躍的発展が共産主義社会の条件などといふのは全く意味をなさない。生産力の飛躍的発展は資本主義でも可能であり、又イギリスのように遙かごから墓場までという社会保障制度も確立されているのだ。人間の欲求が超時間的であるが故に△共同幻想△の質が物的欲求にある時、生産力がいくら飛躍しようとも人間の欲求はかならずその生産力を越えて存在する。マルクスは欲求の質がわからなかつたから、たとえば物がはん盪している現代に何故共稼までせねばならぬのか？ということはわからなかつた。△人間的△仮象をもつた物的満足の獲得へ狂奔させる資本主義の欲求の質が問題なのだ。欲求の質を問題にすることなく、アブリオルに「欲求に応じてとる」などという言葉自身が不毛なのだ。資本主義社会においては物をいくら獲得しても欲求には応じず、欲求はたえず物を越えてあるのだ。だから』「生産力の発展」それ自体が自

然的・必然的に共産主義あるいは労働の廃絶をもたらすわけではなく、当該の生産力を、労働の廃絶を可能とする水準ととらえされる△共同の幻想△との対応、「何を豊かさとするか」という意識の相關の中ではじめて、労働の廃絶は人間にとつて現実の課題となりうるのだ。』（労働の幻想性と國家）と云う片岡啓治氏の視点は正しいといえよう。したがつて△共同体△の関係が人間的となり△個△と△共同体△が重なる真の△共同体△の関係の質を具現化した時、国家の廃絶は可視化されるのだ。すなわち現在の不可視の△革命△から可視の△革命△へ！！である。よつて我々の主体的契機を持つて階級社会の時間・空間の根源へ突き進むべき△同盟・軍・ソビエト△の創出によつて始めて△革命△は現実的に可視化されるのだ。全ての闘う未知の同志諸君！！△革命△を可視化すべく我々無政府共産主義者同盟に総結集せよ！！

えず物を越えてあるのだ。だから『「生産力の発展」それ自体が

後記

公許アナキズムの△擬制△の中で成長した私達は、今、公許アナキズムに対し壮大なる復讐を企画している。これは六〇—七〇年の渦中で、幾度となく私達を襲つた公許アナキズムの白昼のしらじさにも似た白けた実貌に対する、奈落の底で彷徨と苦悶をつづけた私達の反転行為であり、アナキズムの肉貌に迫らんとするものである。大沢、秋山、ゲラン他の似而非アナキズムの試食など、もう厭きた。かかる徒輩はアナキズムとは全く無縁な地平に位置する批評家・壳文屋の「飯のタネ」でしかないのである。彼らの中には幸徳・大杉・ギロチン社・純正無政府主義・無政府共産党・農村青年社の中に脈々と流れていったアナキズムの△炎△すら欠如してしまっている。私達は戦前アナキズムの亜流ではなく、それを超克した中に、△空間△時間△を追撃するアナキズムを試行しているのだが、今日の公許アナキズムは戦前のレベルにさえも到つてはいない。しかもその事は自覚せぬ事に於て彼らはアナキズムを増え空洞化させつつある。從つて私達がアナキストとして、これら似而非アナキストに報復を考えようというのだ。永らく公許アナキズムの中にいた私達には、最早それへの幻想はひとかけらない。だから徹底せる△私闘△を、革命への視座より遂行する事ができるだろう。

私達の前には山積みされた問題がかなりある。日本論・天皇論といふへ日本思想へから存在論・認識論、あるいは革命の極北地へ進撃するための主体一客体の、本質論、技術論的問題である。私達はきわめて遅々としているであろうけれども、これらに対し、はつきりとした結着をつけるであろう。

ともあれ胎動した私達の運動に対し祝杯を交わしたい思いがする。

眞のアナキズム運動が開始され始めたのだから。(狂死)

無政府主義 準備号

編集発行者：「無政府主義」編集委

発行所：ナロード社

(連絡先)

目黒区中根町2-8-5

龍田方 鈴木敏明気付

寺崎 温司

発行日：1971.6.10

価値：70円(送料45円)



